

再々履修者の学習意欲を促す取り組み

加藤 祥子^{*1}, 岡田 礼子^{*2}

What teachers can do to encourage repeater students to keep studying

by

Yoko KATO^{*1} and Reiko OKADA^{*2}

(received on May 29, 2017 & accepted on Jul. 13, 2017)

あらまし

再々履修者の英語必修科目「英語リスニング&スピーキング2」において、学習意欲が低く、学習に嫌悪感さえ持つ学習者に、学習意欲を持たせ、授業に出席する意義を感じさせることを目標に実施した授業の報告をする。まず学生とコミュニケーションを密にとり、根本的な原因を見つけ出した。そして、学生の学習意欲を高めるための試みを3つ実行した。①宿題は毎週の小テストのために自立学習をすること、②生の教材を使うこと、③自信を持ってできる発表形式に変更すること。その結果、授業にきちんと出席し、意欲が向上し自主的に学習するようになり、小テストの成績が上昇し、クラスの雰囲気が明るくなり、学習を楽しむようになった。

Abstract

This paper explains how an instructor motivated students to attend and pass a required English course that they had failed twice before, largely due to absences. The instructor first looked for the causes of the students' absences by listening to them carefully. Then she made three revisions in class activities: autonomous study as homework, authentic materials, and an attainable presentation style. Students gradually learned the meaning of doing homework and class activities, became more motivated, improved their quiz scores, and made good relationships with classmates, which led them to attend classes regularly and pass the course.

キーワード: 第二言語学習, 学習意欲, 出席, 宿題, 生の教材

Keywords: EFL, motivation, attendance, homework, authentic materials

1. はじめに

情報通信学部では、グローバルに仕事ができるエンジニアの育成をめざし、学部開設時以来、高い専門知識・技術の育成に加え、英語コミュニケーション力の養成も、教育の柱のひとつとしてきた。そのため、必修英語科目においては、学力に応じて8レベルにクラス分けし、授業に主体的に参加させ、積極的に活動させることを重視して指導している。また、4科目の英語必修科目(英語リーディング&ライティング1, 英語リスニング&スピーキング1, 英語リーディング&ライティング2, 英語リスニング&スピーキング2)のどの科目においても、発表を行い、発信力の向上に力を入れている。さらに、学生の学習意欲の維持・向上のために、学習に対する積極性や学力の向上に伴い、クラスの入れ替えをセメスターごとに行っている。その成果は、ここ数年におけるTOEICテスト500点以上取得者の増加¹⁾²⁾や、スピーチコンテスト、ライティングコンテストなどでの受賞結果から、明らかである。

しかしその一方、大学全入時代に入って以降、さまざまな学生が在籍するようになり、卒業に必須である

必修英語科目において、クラスの学習活動に参加することができない学生や、毎週継続して出席することができない学生などが、目につくようになり、合格点が取れず、再履修する学生が多くなってきた。また、複数の英語必修科目を再履修しなければならない学生や、再履修しても合格せず、再々履修しなければならない学生も増加してきた。再々履修する学生には、特別な支援が必要と考えられたため、2015年度より、再々履修者の特別クラスを開設している。

本稿では、再々履修者の英語必修クラスの現状を明らかにし、2016年度秋セメに実施した再々履修「英語リスニング&スピーキング2」での新たな取り組みを報告する。

2. 再々履修クラスの現状

2015年春セメスターから2016年度春セメスターまでに開講した再々履修英語科目は3科目7講座であり、各科目の履修登録者数はTable 1に示すとおりである。

これらのクラスは、誰でも自由に履修できるわけではなく、過去に2回以上同一科目で不合格となり、再々履修する必要がある学生以外は原則受講させない方針で実施している。また、受講生が特殊な問題を持つ場合もあるため、担当教員はある程度柔軟に指導するよう、申し合わせている。しかし、必修科目であるため、評価において他の学生と比べて、不公平になるこ

*1 高輪教養教育センター 非常勤講師
Liberal Arts Education Center, Takanawa Campus,
Lecturer

*2 高輪教養教育センター 教授
Liberal Arts Education Center, Takanawa Campus,
Professor

とは避けねばならないため、使用教科書、テスト実施回数、口頭発表実施回数、各活動の評価割合、欠席・遅刻による減点、宿題忘れによる減点、授業中の学習活動不参加による減点などは、一般の必修クラスと共通基準で実施している。

Table 1 再々履修開講科目と履修登録者数

開講 時期	開講科目	履修 登録
2015春	英語リスニング&スピーキング1	21人
	英語リーディング&ライティング1	20人
2015秋	英語リスニング&スピーキング1	15人
	英語リーディング&ライティング1	22人
	英語リーディング&ライティング2	22人
2016春	英語リスニング&スピーキング1	10人
	英語リーディング&ライティング1	10人

高輪校舎の英語必修科目では、週2回の授業を2名の教員がFluency（流調性）パートとAccuracy（正確性）パートとして異なるアプローチで指導しており、主に外国人教員がFluencyを、日本人教員がAccuracyを担当している。そのため、再々履修の「英語リスニング&スピーキング1」においても、外国人教員と日本人教員のペアで指導している（「英語リーディング&ライティング1, 2」は日本語による説明を要する場合が多いため、日本人教員のみが指導した）。担当した教員は、それぞれに工夫して指導をするが、相当数の不合格者が出ていることがTable 2からわかる。（なおTable 2においては、各科目名称をL&S1, R&W1, R&W2と省略表記した。）

Table 2 再々履修英語クラスの合格率

開講 時期	開講 科目	合格 人数	不合格 人数	合格者 平均欠席数	不合格者 平均欠席数
2015 春	L&S1	11人	10人	6.7回	24.5回
	R&W1	13人	7人	5.4回	17.9回
2015 秋	L&S1	9人	6人	5.1回	21.5回
	R&W1	15人	7人	3.3回	15.6回
	R&W2	11人	11人	3.0回	5.3回
2016 春	L&S1	10人	0人	4.9回	--
	R&W1	5人	5人	5.8回	18.5回

学習内容が難しい「英語リーディング&ライティング2」と全受講生が合格した2016年度春の「英語リスニング&スピーキング1」を除くと、概して合格者と不合格者の欠席回数の差が大きいことが分かる。不合格となった学生の多くが、セメスターの早い段階で授業に来なくなり、諦めてしまったと推測できる。これまで、4名の教員がこれらの再々履修クラスを担当し、統一シラバスに従いながら授業計画を練り、授業に参加させる努力をしてきたが、なかなか思うようには進まなかったことがわかる。継続して学習する意欲を持たせるために、何か新しい考え方が必要と思われた。

3. 2016 年度秋セメスターの試み

2016年度秋セメスターの「英語リスニング&スピーキング2」の再々履修クラスは、海外で日本語指導経験が豊富な日本人英語教員が、新たな考え方で、指導に加わることにした。外国人に日本語を指導する際は、日本人に英語を指導する場合と異なる点が多く、特に「教員は教えるというより、facilitator（進行役）として学生の学習活動を促す」とのことで、何か新たな可能性が期待された。

学生が自主的に毎回の授業に来て、活動に参加することを指導の第1目標とし、学生の状況を見ながら、担当教員は授業内の活動を自由に展開して実施することにした。（ただし、基本的なクラスルールや評価基準、使用教科書は変更せずに実施することを原則とした。）また、他の英語必修科目と同様に、日本人教員が担当する1コマ（accuracy）と外国人教員が担当する1コマ（fluency）の両方で2単位を与える科目として開講した。ただし、本稿では日本人教員の実践のみを報告する。

3.1 学生の実態を知る

2016 年秋学期「英語リスニング&スピーキング 2」の再々履修クラスの登録者数は 11 名であったが、3 名は初回からまったく出席していないため、実質受講者は 8 名であった。最初の授業に出席した 8 名の学生に事前アンケートを実施（付録 1）し、2 回不合格になった原因を書いてもらったところ、6 名の学生が「途中から出席しなくなったため」と回答した。さらに個々に詳しく尋ねると、「英語の勉強」に対して嫌悪感を持っている学生が少なくないことがわかった。3 名の学生が「英語を見たくない」「できるだけ英語とは無縁の生活がしたい」と述べると、他の学生も徐々に心のうちを吐露するようになった。学生とのコミュニケーションが深まるにつれ、宿題、テスト、発表などに関して、次のような気持ちを持っていることがわかってきた。

(1) 宿題について

ほとんどすべての学生が、「宿題が欠席した理由と大きくかかわっていた」と述べた。宿題をやっていないため欠席し、その後なんとなく授業に行かなくなってしまったようだ。その理由は「宿題をやっていないと欠席した場合と同等の減点がされたり、注意されて恥をかいったりするため、出席する意欲がなくなった」というのだ。そして、宿題をしなかった理由としては、①時間がかかりすぎてやる気が失せた（5 名）、②単なる作業としか思えず、やる意味が感じられなかった（2 名）、という回答であった。

(2) テストについて

テストが嫌で欠席した学生はいなかった。「宿題が試験の準備に直接つながるのであればやる気になったと思う」というのが全員（7 名）の意見であった。

(3) 教材について

教科書は初めて履修した時も、再履修した時も、

同じものを使用するため、答えなどが書き込まれている場合が多く、マンネリ感が否めないと思われた。教科書だけに頼っている学習意欲を奮い立たせることは困難であると感じた。

(4) 口頭発表について

セメスターの間に2回実施する口頭発表の1回目(第8週)は、教科書で扱った内容(スポーツ)に関連するトピックを選定させ、Topic, Main idea, Supporting details を書き出して原稿を仕上げる、という従来の方法で指導し、準備に授業2回(第6~7週)を充てた。しかし、7名中5名は自力で文章を構成することがほとんどできないことが判明した。英語力の問題というよりむしろ自分の考えをまとめて言語化することができないように見えた。そこで、どう原稿を作ればよいかわからない学生には、個別に日本語で細かく質問をして、内容を決め、文章を構成させるように導いた。たとえば学生Aの場合、以下のようなやり取りを行った。

学生「バスケットボールが好き」

教員「どうして？」

学生「クラブに入ったから」

教員「他のスポーツでなく、どうしてバスケットをやると思ったの？」

学生「おもしろいから」

教員「どういうところがおもしろいの？スピード感？ゴールに入れた時の達成感？」

という具合に延々と続き、英語の言語学習より前の段階の指導に多大な時間をかける必要があり、教員も学生もすっかり疲弊してしまった。

口頭発表の準備ができていなかった学生には、英語力が高く TOEIC で 600 点近くを取得する学生 B もいた。学生 B は普段、与えられた日本語を容易に英語で表現することができたが、自分の考えを発信することがひどく苦手であるように見えた。発表の準備はできていなかったが、「大丈夫です。自分できます。」と本人が言うので個別指導はしなかった。しかし、発表の日には授業に現れず、その後、出席を促すメールを送っても、授業に来ることはなかった。オリジナルの内容を発信することが、学生 B には大変な重荷であったと想像できた。

発表の日(第8週)は、学生2名が欠席し、出席した学生のうち2名は暗記することができず原稿を棒読みした。発表後に、3名の学生が「実生活でこのような英作文をすることはしないし、英語でプレゼンすることもないと思うと、このようなプレゼンは苦痛でしかない。」と言っていた。

学部が掲げる「グローバルに英語で仕事ができる人材をめざす」という目標に向けて実施している原稿作成と発表は、彼らには高すぎる目標であることがわかった。

3.2 指導方針の再設定

学生とのコミュニケーションを密に行うことで、学

生の率直な気持ちを聞くことができた。それに伴い、学生が望んでいない学習をさせていることが、学習意欲を減退させているように思われた。学生が望むことをするのが必ずしもよいとは限らないが、「第二言語習得において、動機づけが中心的な役割を果たすことに関しては、疑念の余地がない」(遊佐, p.157)³⁾。また、Learner autonomy(自律学習)においては、「授業プログラムは、教員・学生・教材(活動)・コンテンツの特性が有機的に統合されるように考案され、学びの結果のみならずプロセスが評価の対象となる」(小嶋, p.164)⁴⁾ということを検討すると、指導の方針を再考する必要があると思われた。そこで、次のように指導方針を変更することにした。

(1) 毎週小テストを実施し、小テストのために、自分の学力に合った学習方法を考えて実行させる。何をどう勉強すれば効果的に学習できるかを自分で工夫させる方法である。これは、"Your tests are not just a necessary evil in classroom bureaucracy but rather are important means for building the competence, autonomy, and self-evaluation among your students" と Brown (p.270)⁵⁾ が述べるように、テストを単なる教員の成績評価の材料と捉えず、自律した学生を育てるために効果的に使うべきだ、と考えたからである。

(2) Authentic materials(実際に生活の中で使われている生きた素材)を主教材として使い、教科書は副教材として使う。Hastings & Murphyが述べるように、"They (authentic materials) provide a depth of interest ... that cannot be found in even the most outstanding textbook series"であると考えた。さらに"most of the materials that ordinary people seek for entertainment and enlightenment are authentic. People enjoy authentic materials and eagerly devote hours of their time to reading or viewing them"⁶⁾と考えられ、自分の興味のために得る情報はどれもauthenticであるから、学生はauthentic materialsなら読みたい・見たいという気持ちを持ち、時間をかけてでも理解しようとするはずである。そうするうちに、手段としての英語の有用性にも気づき、学習意欲も高まると考えられる。これは、双方向授業・自律学習が主流であるアメリカの大学で日本語を指導した際に、学習効果を肌で感じた指導であり、また学生からの評価も高かった活動であったため、再々履修クラスにおけるマンネリ感が払拭できるのではないかと考えた。

(3) 2回目の口頭発表(第15週)は、自分が共感した他者の作品をクラスで紹介する方法で実施する。発表Iの準備から発表まで(第6~8週)の学生の取り組み方が否定的であったため、第8週の発表終了直後に、聞き取り調査を行ったところ、発表課題(main idea + supporting detailsの構成でのオリジナル原稿を作成し、口頭発表する)を達成できそうもないと感じ、大変苦痛に感じた学生が多数いたことがわかった。目標を少し低くして、達成できそうな目標にする必要があると考えた。

3.3 実践と学生の様子

このように方針を改めて、15回の授業を次のように実施した。

(1) 毎週の宿題は「テストの準備学習」とし、自分で学習方法を工夫させた。自主学習のヒントとなるように、次のテストがどのような形式の問題か、文法などの理解が必要か、単語は暗記できれば良いか、正しい綴りで書けることが必要か、などを明確に提示した。また、どのような準備学習が効果的であるかも併せて指示した。

第3週にはうまく機能したように見えたが、第4週の授業で壁にぶつかった。次のような状況で、出席率が50%に落ちてしまったのだ。第3週の授業中に映画の予告を視聴させ、単語を聞き取る活動をした。学生たちは積極的に答えていたので、意欲的に学習できそうだと思い、次週までの宿題として他の映画予告(The Sixth Sense)の主人公のセリフを聞き取ることを課題とした。第3週の授業で映画の内容は説明してあるし、セリフは“I can see a ghost.”という簡単なものであり、英語スクリプトも簡単に入手できるので、課題として問題ないだろうと考えた。しかし、学力下位の学生4人(50%)が第4週に欠席した。宿題が難しく自分で学習できず、その結果、小テストでも答えられないだろうと思った学生が欠席した、と推測できた。学生からの聞き取りで、ターゲットのセリフ自体は簡単であっても、2分弱の英語の動画から、そのターゲットにたどり着くことが困難であったということがわかった。そこで、それ以降は、30秒以内のリスニング課題を選び、ターゲット前後のスクリプトも付けるなど、学生が自主学習に多大な困難を感じないように注意して課題を作成した。第5週以降、出席率が再び上がり、実質履修者7名のうち欠席者は常に1名以内となった。また、それに連動して、セメスター後半の小テストの平均点が上昇し、毎回ほぼ75点を超える(評価B以上)ようになった。

(2) Authentic materials(生きた素材)を学習活動に取り入れた。取り上げる素材を選択するにあたっては、アンケート(付録1)で学生の関心が高かったもの(ゲームや映画)から選ぶように心がけた。

第1週の授業では、一般の必修授業と同様に、主に教科書を使用し、authenticな教材には20分程度のみを費やした。教科書で学習している間は、授業参加に拒否反応を示していた学生2名が、生きた素材を使って画像や動画を見ながらの学習になると、抵抗なく学習活動に取り組むようになった。

しかし2週目の授業に3名しか出席しなかった(出席率37%)ため、予定を変更して、教科書の使用を20分程度に抑え(リスニングクイズとその解説のみ実施)、残りの時間すべてをauthenticな教材とそれに伴う学習活動に充てた。3週目以降も同様の授業構成で実施したところ、学習活動に積極的に取り組む様子が見られ、また、宿題の難度を下げたことと相まって、第5週以降、出席率が上がった(Table 4)。使った教材とその学習活動は、付録2に示す。

(3) 発表II(第13~15週)では、自分が好きな英語

の歌・会話・話などを選び、暗唱し、他の人に共感を与えるように提示する、という方法で実施し、英文とその日本語訳をレポート形式で提出させた。

発表IIの準備1(第13週)の授業で、歌(Let it be)、映画予告(Star Wars)、ゲームのオープニングデモ(VR)などの動画を見せて、各自の英語力に応じてどのような選択肢があるか、また、どのように発表することができるか、などの可能性を示した。準備1回目(第13週)で、すでに題材を決めた学生が多く、準備2回目(第14週)では英文の日本語訳の校正に入る学生もいた。発表Iの準備の時とは異なり、学生は自主的に準備の学習をし、教員はほとんど何も指示する必要がなく、学生の質問に応じて英文理解の手助けをするだけでよいほどだった。

発表Iと発表IIの評価は、Table 3に示す通りで、発表IIでの向上がよくわかる結果となった。(学生Bは発表Iの第8週から、出席しなくなり科目履修を断念したと思われるため、発表IIの人数に含めていない。)

Table 3 発表Iと発表IIの評価

評価	A	B	C	欠席
発表I (8名)	1名	3名	2名	2名
発表II (7名)	6名	1名		

発表Iでは全くやる気が見えず最低点を取った学生Cは、発表IIで特に顕著な向上を見せた。発表IIでのトピックを「ゲーム内の会話」とクラスで1番に決めた。ゲーム内の会話のスクリプトはどこにも存在しないため、何度も何度もセリフを聞いて独力で英語に書き起こした。会話のスピードはかなり速く難易度が高いものであったが、「自分の好きなゲームなので繰り返し視聴しても苦にならない。英語が聞き取れると楽しい。」と意欲的に原稿作りに励んだ。口頭発表ではミスはあったもののクラストップの成績でのA評価となった。

15週間の実施内容、出席者数、問題点とその修正をTable 4に示す。

学生に意欲的に授業参加させることを目標に、前述のような思考錯誤をしながら、再々履修者向け「英語リスニング&スピーキング2」の授業を実践した。最終的に、実質8名の受講者のうち、7名が単位を取得し、途中でやめてしまった学生は、発表Iの日(第8週)以降来なくなった学生Bだけであった。

Table 4 実施内容と問題点

週	発表	生きた素材	宿題 (テスト準備)	出席 者数	問題点と修正
1				8	教科書中心の授業
2		バラエティ番組	単語テスト1	3	生きた素材中心の授業
3		映画の予告編	教科書 聞き取りテスト1	7	広範囲からの聞き取り宿題
4		ノーベル賞受賞者の楽曲	生きた素材 聞き取りテスト	4	テスト範囲が明確な宿題

5		コマーシャル	教科書 聞取りテスト2	7	
6	発表 I 準備 1		教科書 読解テスト1	7	
7	発表 I 準備 2		発表原稿	6	
8	発表 I	人気アーティストの歌	発表準備	6	原稿作成を含めた発表
9		通販サイト	単語テスト2	6	
10		コマーシャル	教科書 聞取りテスト3	7	
11		ツイッター	文法テスト2	7	
12		トランプ氏の演説	教科書 読解テスト2	7	
13	発表 II 準備 1		センター試験 抜粋	7	↓ 英文の紹介・ 翻訳の発表
14	発表 II 準備 2		発表準備	6	
15	発表 II		発表準備	7	

4. 考察

再々履修英語科目「英語リスニング&スピーキング 2」で、学生の学習意欲を向上させ、授業に継続して出席させることをめざした15週間の指導は、3つの主な試みを通して、まずまずの結果が得られたと思われる。

第一に、毎週の宿題を「自分で工夫してテストのための準備学習を行うこと」としたことで、自分で学習方法を選択させ、自律学習をさせることができた。"Encouraging learners to make choices is ... an important aspect of learner independence.... we convey to our learners the important message that they have responsibility for making decisions about and taking control of their learning" (Nunan, p.193)⁷⁾を実践できたと思う。そして、学生は学習の意義を感じて課題に取り組み、学習意欲も向上した。特に、第2週と第4週で出席率が50%以下に落ちたとき、学生と密にコミュニケーションをとって宿題のあり方を考え、自律的に学習できる方法を考えなおしたことが、出席率を回復させることにつながったと思う。また、出席率向上と同時に、小テストの平均点がセメスターの後半に上昇したことは、学習意欲だけでなく学習効果もあったことを示している。さらに教員にとっては、毎週きちんと自律学習をさせ小テストに解答させることで、学習の理解度を正しく把握でき、進度や指導方法の調節がうまくできるという効果があった。

しかしそのためには、毎回の宿題が、学生の学力に合ったものでなければならず、一般の必修授業で指導する場合と異なり、宿題とテストの準備に多くの時間をかける必要があった。

第二に、Authentic な教材を使って行う学習活動は、沈滞気味の再々履修のクラスを活気づけることがで

きた。英語で歌を歌ったりニュースを見て政治について考えたりしている間に、自然に言語が身につくイメージ教育的效果もあり、学生の満足度が上がったと感じられた。また、authentic な教材を用いた学習では、様々な学習活動が可能であり（付録 2 参照）、学生間の年齢差・学力差を気にせず、楽しく実施できることから、学生同士の結びつきが深まり、サークル活動のような要素が生まれた。その結果、個人的に連絡を取り合って出席を促し合う学生も増え、出席率を高く維持するきっかけにもなった。

Authentic な教材には、このような効果がたくさんあった一方、Hastings& Murphy が述べるように、"we cannot just pull them (authentic materials) off the shelf on the way to class and expect them to magically create wonderful lessons" であるため、教員の毎週の準備はたやすくはなかった。教科書の使用を減らした分、適切な authentic material を毎週探し、有意義な学習活動を色々考えて準備する必要がある、達成感を感じさせる授業を計画するために、頭を悩ませることも多かった。

第三に、口頭発表の方法を変更したことは、学生の不安・不満を解消し、やる気を起こさせ、その結果、クラス全体の雰囲気明るくなる、という良い結果を生んだ。「口頭発表 II の発表方法を変えます」と告げた時期から、学生同士が打ち解けあい、クラス全体が明るくなり、その後の出席率が高く維持された。発表 II の後には、全学生が「発表のための準備は面白かった」と述べており、学習者に合った発表方法に変更したことで、学習意欲を高めることができたことがわかり、非常にうれしく思った。

これらの実践を行い、また欠席した学生にはメールを送り出席を促すなどして、出席率を高く維持することができ、8名中7名が単位を取得した。学生と密にコミュニケーションを取り、学生の様子を細かく観察し、随時軌道修正を行うという方法は、再々履修者クラスには、大きな効果があったと思われる。

5. おわりに

学習にまったく自信をなくしてしまったり、嫌悪感を持ててしまったりしたため、学習を継続する気持ちになれない学生をどのようにケアするかは、難しい問題である。本実践では、自分で学習方法を選ばせ、生の教材を使用し、高すぎる目標を少し低くする、ということを試み、学生の気持ちを前向きにすることができた。「学習者をよく観察して理解しようとする授業者に出会ったりすることで、多くの学習者は『もう一度学び直してみよう』という、新たな学習動機を得ることができる」（渡辺, p. 236）⁸⁾ということを実感した。

大勢の学生を高い目標に向かって教育する責任がある教員が、様々な特性を持つ個々の学生に対して、どこまで手間をかけ、時間をかけて指導することが

できるか、またするべきか、は多くの教員を悩ませている点である。しかし、学力の低下や意欲の欠如を嘆くばかりではなく、個々の学生の向上を図るためのあらゆる方策を考え、試してみる必要があると考える。今回の実践結果を多くの教員と共有し、今後の学部全体の指導の向上に反映させたい。

参考文献

- 1) 岡田礼子：主体的学習を促すTOEIC®受験支援，東海大学教育研究所研究資料集 No. 22, pp45-54, 2014
- 2) 岡田礼子：主体的学習を促すTOEIC®受験支援—2年目の課題—，東海大学紀要情報通信学部 Vol. 8, No. 2, pp30-34, 2015
- 3) 遊佐典昭：第二言語習得研究，森住衛・神保尚武・岡田伸夫・寺内一編「大学英語教育学—その方向性と諸分野」，pp150-161, 2010
- 4) 小嶋英夫：成長する英語学習者，森住衛・神保尚武・岡田伸夫・寺内一編「大学英語教育学—その方向性と諸分野」，pp162-173, 2010
- 5) H. D. Brown, *Principles of Language Learning and Teaching*, New Jearsy: Prentice Hall, Inc., 1994
- 6) A. Hastings and B. Murphy, Thoughts on the Use of Authentic Materials, International Center for FOCAL SKILLS, 2002
<http://www.focalskills.info/articles/authentic.html>
- 7) D. Nunan, *Second Language teaching & Learning*, Boston: Heinle & Heinle Publishers, 1999
- 8) 渡辺敦子：英語授業デザイン，森住衛・神保尚武・岡田伸夫・寺内一編「大学英語教育学—その方向性と諸分野」，pp226-238, 2010

付録1 事前アンケート

1. Why do you think you failed this course twice?
2. What are you interested in?
3. What do you want to buy now?
4. What smartphone do you have?
5. What kind of video game do you usually play?
6. What kind of social game do you usually play?
7. What is your pc's maker?
8. What is your most favorite game title?
9. Can you write a program? If yes, what language (ex. C, C++, Java, Swift, Python, Ruby etc.)?
10. Where do you live? How long does it take for you to come to school?
11. Do you have a part-time job? If yes, what type of job? How often do you work?
12. What is the best movie you have ever seen?

付録2 Authentic 教材とそれに伴う学習活動

「コマーシャル」
英語の発話に日本語のテロップの出るものを取り上げる。中学生レベルの英語であっても日本語から英語にするのは簡単ではない。長いセリフだと無理だと諦め意欲をなくすので短くてわかりやすいセリフを選んで、聞いたままを書きだすことをクイズにする。個人戦あるいは団体戦にして、ある時間内に正確に書き出した学生あるいはグループのメンバー全員に評価に結び付くポイントを与える。最後に正解を教え、文法解説の後一斉発話練習、さらに動画を見ながらオーバーラッピングさせる。できるだけ最新のものを取り上げるとコマーシャルを見るたび復習になるので効果が高いと考える。

「映画予告編」
アカデミー賞候補作など流行の作品あるいは事前アンケートで人気のあった作品の中から簡単な英語でスラングの少ないものを選ぶ。まず英語だけのものを数度見せ、グループで話し合わせて内容を推測させる。逐語訳というよりシチュエーションの理解に重きを置く。次に日本語の字幕のあるものを見せ、推測があっていたグループのメンバー全員にポイントを与える。スターウォーズやハリーポッターなど多くの学生がストーリー知っている映画の予告の場合はセリフを書きださせ、文法解説の後オーバーラッピングさせる。

「ツイッター」
公人のものは文法が正確で分かりやすい英語が使われており、最新のアメリカ文化・経済・政治が学べる格好の素材である。主に読解問題として使用する。口頭で内容に即した問題を出し、答えを紙に書かせる。動画も 140 秒と短く使いやすい。今期はアメリカ大統領選のおかげで英語が読める、書けるということが情報戦でどれほど有利であるか、また英語を使えばいかに容易に世界に発信できるかということを学生にしっかりと認識させることができた。

「歌」
楽曲の一番だけを音声のみで聞かせてから英字幕のついた PV を見せる。次にサビの部分だけクラス全体で曲にあわせて歌わせてから、その部分の訳と文法解説をする。コマーシャルの BGM など最新のものが望ましい。今期はボブ・ディランがノーベル賞を取ったので導入しやすかった。ビートルズやカーペンターズは今でも CM やドラマに使われ、学生たちにもなじみがあり好評である。学期末の発表ではこの 2 グループの歌を歌った学生が複数いた。ただ、JASRAC が教育の現場から著作権料を取ると言っている現状ではいろいろ注意が必要である。

「通販サイト」
アメリカの通販サイトを利用して指示された条件を備えたアイテムをグループで探させる。順番に前に来て教室のコンピューターで探す過程をスクリーンに映し出し、クラス全体で見る。値段・商品説明だけでなくカスタマーレビューも参考にさせる。ある一定時間に探せればグループメンバー全員にポイントを与える。

「ゲーム」
事前アンケートで人気のあったゲームのオープニングデモを見せる。ゲームごとに話題になっている言い回しがあるので、その訳と文法解説をする。ゲームの手順や進行を教師が英語で質問して、そのゲームに精通している学生に説明させる。他のゲームと比較させると学生は意欲的に取り組む傾向にある。

「新聞・ニュース」

読解演習に使用する。記事のメインアイデアは何かをグループで考えさせる。経済や政治など学生があまり興味をもたず専門用語が難しいものより、芸能や三面記事的な娯楽性の高い内容のものを選ぶ。今期は SMAP の解散が海外でも記事になったので取り上げた。また VR などゲーム関連の商品発表も学生の関心が高く、クラスでの議論が盛り上がる。